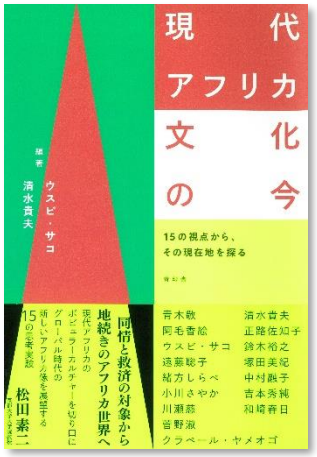

現代アフリカ文化の今
――15 の視点から、その現在地を探る――

ウスビ　サコ・清水　貴夫　編著

京都　青幻舎　2020 年　209p.

アフリカは近年、最後のフロンティア市場として世界の期待を集めているが、アフリカと聞いて一般の日本人が思い浮かべるのは、いまだに内戦、貧困、病気、野生動物や大自然といったイメージなのではないだろうか。日本にアニメや漫画といったポップカルチャーがあるように、現代のアフリカにもさまざまなポップカルチャーがあるはずだが、それに触れる機会は日本の日常生活ではほとんどないように思う。

本書は、現代アート、建築、アニメ、音楽、ダンス、ファッション、映画などを切り口に、16 人の専門家が、現代アフリカの多様な文化をとりあげた本である。構成は、序文、座談会、それに続く 3 部 15 章（コラム含む）からなる。座談会は 2019 年 12 月に京都精華大学で開催されたシンポジウムの報告である。第 1 部は文化の作り手・担い手たちの生きる社会に焦点を当てる。第 2 部はアート、建築、音楽、ファッションなどのそれぞれの領域における文化の今を紹介する。第 3 部は、アフリカ大陸を超えてグローバルに活動するクリエーターたちや祖国を離れて暮らす移住者たちのコミュニティ活動を取り上げる。

評者がもっとも興味深く読んだのは、第 2 部で取り上げられたナイジェリアの都市のアートと西アフリカの服地パーニュの章だ。ナイジェリアの地方都市イレ・イフェでは、アーティストたちがその土地の政治的・宗教的リーダーが使用する装身具や彫像を製作したり、一般の人々のライフイベントでの贈り物を製作したりしながら、国際的なマーケットも目指している。西アフリカの女性たちが自分好みに仕立てて身に着けるパーニュと呼ばれるプリント更紗は、現代アートでも用いられ、その作品は国際的にも高く評価されている。どちらの事例も、その土地に根ざして作品製作がおこなわれながら、その活動は決してその土地だけにとどまっていない。

本書はフルカラー印刷で、インフォグラフィックや写真の多い本になっている。多彩な文化を知るうえで視覚的な情報はとても有用である。ひとつだけ残念なのは、（仕方のないことだが）音楽や映像は紙面上に再現できないことである。たとえば、冒頭の座談会ではその時に上映された民族誌映画の解説がある。できれば解説を読みながら実物も観られたらよかった。しかし、そのせいで本書の魅力や重要性が大きく損なわれるわけではない。本書はアフリカの現代の多様な文化とそれをとりまく社会環境を知ることのできる数少ない貴重な本である。

岸　真由美（きし・まゆみ／アジア経済研究所）

© IDE-JETRO 2021